



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

魚木忠一編「木月遺稿」

著者	笠原 芳光
雑誌名	基督教研究
巻	28
号	2
ページ	167-168
発行年	1955-02-18
権利	基督教研究会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000003744

H. L. Cooke and J. McA. Smiley,

Atlas of Islamic History,

Princeton Oriental Studies, Vol. 12, Princeton, 1952.

この地圖の本來の編纂意圖は、學生、實業家、外交官などの用のためであると序文に斷つてゐるが、イスラーム關係の歴史、地理の學術書を基本とし、アラビア在住の米人の指導をも受けて、科學的實證的に編纂されたものである。七世紀から現代に至るまでのイスラーム發展史を、二十葉の綿密な大型地圖に託して敘述している。この歴史地圖において注目されることは、ヨーロッパ地域、地中海地域、アフリカ地域、アジア地域に分つてイスラーム勢力の消長を詳述していることと、歴史的年代の學術的考證が徹底して行われていることである。

プリンストン大學の寄與もさることながら、アメリカにおける宗教史研究の業績のバロメーターを指示するものとして、この地圖の刊行は興味深いものがある。
(以上三書民秋)

魚木 忠一編

木月遺稿

昭和二十九年九月發行 木月遺行刊行會
B 6 版 一六五頁 頒價一五〇圓

新刊紹介

木月道人とは、なかく新潟の新發田教會の牧師であつた難波宣太郎のこと。その號は木曜日と月曜日に踏傍傳道をしたことに基くという。青雲の志を、かえりみられぬ草深い地に投じ、みずからその風土に化しつゝ庶民のなかに諄々と福音を説いて、生涯やむことのなかつた人である。二千首にあまる漢詩に、數百點の墨畫や淡彩、それに讀する書と、また獨特の傳道文書、その實の數々を遺して彼が戦いもおわろうとする年の暮春、天に召されてから十年の歲月が流れた。これは、そののこされた筆の跡を、もはやこれも今は召されて地にあらぬ故魚木忠一教授が、敬慕と愛惜のおもいをこめて選し、編まれた一冊である。

まず巻頭に飾られた遺影には、晩年なお童顔に恵まれたこの人の姿をうかがい、心温まるおもいがする。さらに襖十二枚に描かれた梅、臥龍松の大作をはじめとする墨繪のいくつかを寫眞によつて見ることが出来る。生涯、師らしい師につくことのなかつた人にして、このような雄渾の筆勢を見るのにおどろかされるではないか。それにつづく魚木教授の木月小傳は、難波宣太郎の生ける日のおもかげとあゆみとを傳えてあますところがない。そのおわりに近く「北國の冬の爐を圍んで、番茶をすすり、いり豆をかじりつつ友と談じあい、天恩を語つては、涙に眼をうるおすことがあつた。彼こそは、日本の風土にしつくりとあう傳道をした牧師と言えよう。」また、「花に暮れて家路にむかふころ哉、と辭世の句が記されてあつた。五月初めの京都にはもう櫻も無かつた。」土に化しつゝ天をめざしたひとりの生涯が、こんなにも美しい、

平明な文章でしるされているのである。

この書の大部分をしめる木月詩選は、五言または七言の絶句と、數篇の長詩によつて成つてゐる。唐詩選を愛誦したという木月の作には、畫讀もあれば、日常身邊を詠んだものも多く、そのなかには彼の信仰や感謝が折にふれて、さやかに示されている。

回首相知四十年 首を回らせば相知ること四十年

芳情多謝似清泉 芳情謝すること多く清泉に似たり

高堂今夜來爲客 高堂今夜來つて客となる

俱語天恩淚欲漣 俱に天恩を語つて涙漣たらんと欲す

また、海老名彈正、宮川經輝、柏木義圓、西尾幸太郎などの敎職に呈した詩も少からず、いまは御國にかえられた舊師を眼前にするがごとくである。

さらには「多禰まき」と題する傳道文書や、いくつかの傳道歌集がある。新潟縣下の傳道のため、ある年には一萬部も印刷したという「多禰まき」は、およそこんな文體で綴られている。「これのみならず、イエスの仰せは、オドロクばかり、ワレこそは。天の父上。最愛の。タツタ一人の。ヒソウムスコ。神さまの。おこころ知つて。をるものは。ひろいセカイに。ワレ一人。」そして最後に、木月と親戚關係にある小靈力氏が、したしくあとがきを記されている。「このようなたちでの傳道をなしうる者は、今日までもすくなかつたが、今後はさらに乏しいであらう。」と。

この書には、信仰と藝術という問題に對する一つの示唆が興えられてゐるのではあるまいか。比屋根安定氏は「福音と世界」の

書評で、木月の身邊詠が一般人のそれと大差ないことを問題にしておられるが、信仰者の藝術に直接的な信仰の表白のみ求めるのは偏狭であらう。木月の詩書畫は必ずしも傳道を意圖したものはなく、むしろ彼の豊かな信仰生活、牧會生活から咲きいでた華である。しかも時ありては、そこにはげしい證言がなされてもいる。かかる全人的作品を餘技とみるのは誤であらう。難波宜太郎は、主より享けた生命のあらゆる反射をここに遺してくれたのである。

(笠原芳光)

文學博士 有賀鐵太郎
文學博士 魚木 忠 一 共著

基督敎思想史

二五〇圓 敎文館發行